

2022 年元旦社説を読む

写真は 2022 年元旦の朝焼けの空。7 時 13 分と 17 分に撮った。あつい雲に覆われていたが、徐々に明るさを増してきた。いまの世の中を象徴しているようだ。こんな年にしたいものだ。ことしも生駒山あたりの朝焼けを「定点観測」していきたい。



私の元日恒例といえば、購読紙以外の新聞を買い求めることだ。新聞を求めてコンビニめぐりをするが、今年は 1 軒で手に入った。元日の新聞はボリューム一杯だが、正直あまり読むところはない。でも各紙が何を主テーマにしているのか、とりわけ社説から論調を読みとることができる。

ことしの社説見出しを順に紹介する。読売「災厄越え次の一步を踏み出そう「平和の方法」と行動が問われる」、朝日「憲法 75 年の年明けに データの大海で人権を守る」、毎日「再生 22 民主政治と市民社会 つなぎ合う力が試される」、日経「資本主義を鍛え直す年にしよう」。産経は社説ではないが 1 面に「年のはじめに さらば「おめでとう憲法」よ」。

とくに印象に残った毎日社説の一部を紹介しよう。

「数の力」にもものを言わせる政治と、市民との距離が広がっている。象徴的なのが、今年 5 月に本土復帰 50 年



を迎える沖縄の米軍基地問題である。19 年の県民投票では、普天間飛行場移設のための辺野古埋め立てへの反対が 7 割に上った。しかし、政府は「辺野古が唯一の解決策」との姿勢を崩さない。地元の民意が置き去りにされたまま、現場への土砂投入が続く。

台湾を巡って米中対立が激化すれば、在日米軍施設の 7 割が集中する沖縄は、その最前線に立たされかねない。日本の安全保障と沖縄の人々の暮らし、国と地方一。立場や意見が異なる中、政治はもつれた糸をほぐし、両立への「解」を見つける努力を尽くしてはいない。「基地あるがゆえに沖縄は民主主義、人権、環境の問題に立ち向かってきた」。半世紀前の復帰時、手製の「日の丸」を振った玉城デニー知事が語る。「炭鉱のカナリア」という言葉がある。坑内に迫る危険を小鳥が炭鉱夫に知らせたことに由来する。

「沖縄は日本の民主主義のカナリアだ」。沖縄国際大の前泊博盛教授はそう形容する。

(2022 年 1 月 2 日)